属性というものがある。

ジャンル、フェチ、性癖と呼んでもいい。要は『こういうの好き！』という、堪(たま)らない要素というのが人それぞれにあるはずだ。

『巨乳／貧乳』『ポニーテール』『ツンデレ』『幼馴染(おさなじみ)』『魔法少女』『男の娘』等々、昨今の属性の多様化は留まるところを知らない。業(ごう)が深いと言ってもいい。なんなら、ちょっと引くものすら少なくない。何がとは言わんけど。

そんな属性の多様化・複雑化が進む中にあって、強い人気を誇るのが『妹』である事に疑いの余地はないだろう。これを読んでいる『あなた』は違うとしても――だ。

『ケモノミミ』と『メイド服』もまた、属性としては有名(メジャー)で愛好者も多い。仮に『あなた』はそうでないとしても。

であれば、それらの属性を重ねる事で、より高次元の『萌え』に至れるのではないか？

無論、属性の組み合わせは衝突(コンフリクト)を起こし、時に争いに発展する危険(リスク)を孕(はら)んでいる事は承知している。だが、それを恐れ、歩みを止める事は許されない。我々は既(すで)に走り出してしまったのだから……。

要約すると――妹にメイド服を着せてネコミミ付けたら最強じゃね？

16 戦目

ネコミミでメイドな妹は好きですか？

俺の名前は 橘(たちばな) アサト。

地元のゾイエス学園に通っている、高校三年生の極めて平凡な男子だ。

「……」

さっそくで悪いが前言撤回だ。

俺は『極めて平凡な男子』ではない。

新年度だとか、高校三年生を繰り返している気がするだとか、なんで郵便ポストは赤いのかとか、そんな事はとりあえず、今はどうでもいい。

それより問題は目の前にいる妹だ。

『極めて平凡な男子』は、メイド服を着てネコミミを付けた実の妹から迫られたりはしないだろう。知らないだけで、実は普通にどの家庭でも見られる光景である可能性はゼロではないが、限りなくゼロに近いと思われる。少なくとも俺は聞いた事がない。

迫られているといっても、互いの距離は五十センチは離れている。だが、『圧』がすごい。少女漫画よろしく、イケメンに『壁ドン』されている主人公の気分だ。

「――兄さん？」

目の前の妹――カナコが小首を傾(かし)げる。可愛い。

彼女は二つ年下の高校一年生だが、整った容姿と静謐(せいひつ)な雰囲気から、『可愛い』よりも『綺麗』という印象が強い。だからこそ、小鳥のような仕草との差異(ギャップ)で、より可愛らしく感じてしまう。こればかりは仕方がない。

順を追って状況を話そう。

ひょんな事から此処(ここ)――『きょくちせん屋』の店長となった俺は、定期的に店に顔を出さなくてはいけなくなった。そんなある日、従業員用の休憩室に入ると、出勤していたカナコが現れたのだ。無言で二人きりなのを確認すると、なぜか妹は部屋の鍵を閉め、『どうですか？』と宣(のたま)った。

普段と違う装(よそお)いで、期待と不安の入り混じった表情を浮かべられ、何を問われているか判らないはずもない。メイド服姿の感想を求められているのだ。ちなみにカナコの普段の制服は和装エプロンであって、メイド服ではない。ヤミヒメ達が着ているのと同じデザインだが、彼女が着ているのは初めて見た。新鮮でとても良い。

「あー、うん……すごく良い」

何時(いつ)までも黙秘し続ける訳にもいかず――無言の圧に負けた訳ではない――素直に答えた。さすがに実の妹に向かって、それ以上の言葉は互いに気まずいだろう。

「……本当ですか？」

「ああ」

やや顔を俯け、上目遣いで此方の様子を窺うカナコに答える。

「欲情しますか？」

「……ん？」

聞き間違いだろうか。顔を上げ、ほんのり頬を染めた妹に、俺は反射的に聞き返していた。

「あ、そうですよね。さすがにこのままじゃ……」

「待て待て待て待て」

何を思ったか、徐にエプロンの腰の紐を解き、ドレスの胸元を緩め始めた妹を制止する。

「――え？　ああ、そういう事ですか。では、兄さんの好きなように――」

「違うから。俺が自分で脱がしたいとか、そういう意味じゃない」

きょとんとした直後、察した様子で両手を後ろに回し、少し困ったような表情を浮かべるカナコ。恥ずかしいけど嫌ではない――そんな羞恥と困惑が入り混じった様子に理性が飛びそうになるのを堪え、妹の勘違いを正す。此処はそういう店ではない。

そもそも俺達は兄妹である。近親相姦など中世の貴族でもなければ、創作物でしかありえない。そんな現代の倫理観に反する行為はよろしくない。ここは兄としてびしっと言ってやらねばならないだろう。

「……」

開いたドレスの胸元に視線が吸い寄せられる。窮屈そうに寄せられた胸の谷間が、まだ布に隠されている豊かな膨らみの存在を訴えかけてくる。見たい。触れたい。これ以上は自粛するが欲望がむくむくと膨らむと同時に局部というか俺自身もまたむくむくと体積を膨張させ――

「えーっと……急にどうした？」

このままでは不味い。理性を総動員して視線を上げ、カナコの顔を正面に捉える。『もう少しだったのに』と言わんばかりの不満顔を浮かべている。危うく術中に嵌るところだったらしい。

「紅桜から聞きました。兄さんがツバキのメイド姿にデレデレしていたと」

〈管理人〉がやっている配信番組用に、ツバキがメイド服を着ていた時の事を思い出す。

「別にそれはいいんです。ツバキは可愛いですから、ええ」

嫉妬している訳ではないらしい。カナコはツバキを溺愛しているので、嘘ではないだろう。

「ただ、私が着ても兄さんが同じ反応をしてくれるか気になって……。それで、私も用意してもらったんですけど――」

今度はカナコの視線が下がり、俺ののっぴきならない状態になってしまっている部位を見つめる。

「……効果は抜群のようですね」

視線を戻し、そう言ったカナコは顔を赤くして、少しだけ俺から目を逸らした。妹の反応がまだ初々しかった事だけが救いだが、兄の威厳が崩壊した瞬間であるのは間違いない。死にたい。

Mission complete

あとがき

どうも、流遠亜沙（るとおあさ）です。

『そーりょくせんっ！』十六戦目をお届け致します。

一年ぶりの更新です。サイトが八周年なので、それ用に描いたイラストありきで書きました。

今回はアサトの実妹のカナコです。彼女にメイド服を着せたかったんです。それ以上でも以下でもありません。もっと箍（たが）を外したい気持ちはありますが、まだこのくらいにしておきます。

実妹ヒロイン、どうですか？

よきところで謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。更新頻度ガタ落ちですが、今年は季節に一回くらいはイラスト描きたいので、『そーりょくせんっ！』もそれに合わせて書けたらとは思ってますが明言はしません。自信がない！

２０２２／３／29　流遠亜沙

アンケートに答える

『そーりょくせんっ！』ページに戻る